

歎異抄 第四章

一 慈悲に聖道・浄土のかはりめあり。

聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれども、おもふがごとくたすけとぐることに、きはめてありがたい。浄土の慈悲といふは、念仏して、いそぎ仏に成りて、大慈大悲心をもつて、おもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり。今生に、いかにいとほし不便とおもふとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。しかれば、念仏申すのみぞ、すゑとほりたる大慈悲心にて候ふべきと「云々」。

仏教には聖道門と浄土門の違いがありますが、仏教の根本である慈悲についても聖道門と浄土門には違いがあります。

聖道門の慈悲といえますのは、わたしたちが他の生きとし生けるものをかわいがり、その生けるものをいとおしく思い、それを育てようとする慈悲です。しかし、わたしたち無力な人間の世界にありましては、わたしたちの思うままに、徹頭徹尾他の生けるものを助けることは極めて困難なことです。

逆に浄土門の慈悲といえますのは、念仏をして早く仏さまになって、仏さまの持っている大きな愛の心、大いなるあわれみの心でもって、思うように生きとし生けるものをすくいとり、生きとし生けるものに利益を与えることを言います。

この世のなかでわたしたちがどんなに生けるものをいとおしい、かわいそうだと思っても、わたしたちの思い通り、いとおしいものをすくうことができませんので、そういう慈悲は結局首尾一貫しない慈悲であります。だから、この世のことは業にまかせて、ひたすら念仏するのが首尾一貫した大きな慈悲でありましょう。

【慈悲】迷いや苦悩を取り除き、他に楽しみを与えること。慈は抜苦、悲は与楽とも言う（曇鸞『往生論註』）。

【聖道・浄土】自力を重んじる聖道門と他力を重んじる浄土門ということ。

【もの】生きとし生けるもの。一切の衆生。

【かなしみ】いとおしみ、かわいがること。悲歎の意味はない。

【大慈大悲心】仏の慈悲心を強調して言ったもの。

【利益】仏教では他人に利益をもたらすものを言い、自分に利益になることは功德と言う。

【不便】不憫。かわいそうに思うこと。

【存知のごとく】自分の思うように。

【始終なし】徹底しない。

【すえとをりたる】終わりを全うする。徹底する。

「始終なし」の対語。